

(前頁の続き) 私たちの宗門は、門信徒一人ひとりに、み教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあつて、浄土真宗のみ教えや伝統にある多様な可能性を見つけ出し、各人、各世代、それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性と実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会をめざして歩むことができるよう願っております。

後を継ぎます新門主は、築地本願寺で五年九ヶ月の間、副住職を務めて経験を積み見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様の一層のご支援をお願いいたします。

なお、私は、七十歳まであと一年余りとなりました。先のことば予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の僧侶としての務めを、できる限り果たしたいと思っています。

二〇一四年
平成二十六年 六月五日

龍谷門主 釋即如

2013年 白道会大会

いのちの根源

—中村薫先生（同朋大学）—

去る八月二十四日と二十五日、蔵本通支坊で白道会大会が開かれました。今年には中村薫先生(同朋大学元学長・現同朋大学教授・大学院教授・文学博士)におこしいたごき、二日間にわたり「いのちの根源」をテーマにお話いただきました。以下は公開講演会「まず有縁を度すべし」の要約。

名古屋の同朋大学からまいりました中村薫と申します。「宮市養蓮寺の住職もしております。今回お話ししたいことは「まず有縁を度すべし」ということと、『歎異抄』第五条に出てまいります。「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。」親孝行のために念仏申したことはない、とんでもないようなことをおっしゃった。いったいどういふことか。その最後のところに「まず有縁を度すべし」とあります。今日はこのことを、私の出あった事柄を通して聞いていただきたいと思ひます。

今日申し上げることは二点ほどあるんですけれども、その一つは、二〇〇四年の七月、大変喜ばしい日でした。私の一番

上の娘が二十九歳で自ら生命を断つてしまいました。結婚して子どももいませんが、家に帰ってきていました。なぜ自ら生命を断つてしまったのか、ひとつには躁鬱という病に苦しんでいました。両極性の躁鬱、躁と鬱が交互に出てきます。たとえば躁になると二晩三晩寝なくても大丈夫。次は激しい鬱。暗い部屋で黙って沈み込んでしまう。怠けてるんじゃないのって言われるけどどうもじゃない、身体が動かなくなる、こういう病気でございます。その中に色んな症状が出てきます。パニック症候群といつて、恐怖におののき、いてもたつてもいられなく不安が襲ってくる、あるいは分裂してしまふ、言っていることとやっていることが何かが分からなくなつてしまふ等々の病氣、日本には現在三百万人いらっしゃるお聞きしています。どうしてそうなるのか、脳の病です。状況によって起きてきます。

私の娘は躁鬱で薬を飲んでいたので、五月に薬を飲むのをやめてしまったんです。もつ自分の力で頑張ろうと。こういう行動に出て反動が来ちゃったんです。苦しくて苦しくて、ある薬一

袋全部飲んでしまったんです。救急車で運ばれて胃を洗ってもらったんですけど、飲んでしまったことにショックを受けて、それでまた気が重くなってしまうって、最後に自ら命を絶ってしまいました。

みなさんの中で身近な方でお医者さんにかかっておられる人がおありでしたら、決して薬は自分でやめないように。薬だけがいいとは言いません。しかし薬を飲まなければ治らないこともあります。ですからカウンセリングと薬と両方を上手く兼ね備えていくことが大事であって、自己判断で薬をやめてしまうと反動がやっつきまして、自殺願望欲という状況に陥ります。毎年自死される方の半数近くが鬱病で亡くなっているといわれます。

有愛非有愛

鬱病はお医者さんにかからなければなりません、われわれの心でひとつ考えてみます。有愛・非有愛という言葉があります。愛は

ラブというよりも渴愛、執着すること。有愛は死にたくないという欲、思いの中にあるのは「死にたくない」、いつまでも娑婆に未練があるのが我々の思いじゃないでしょうか。死にたくないという生命に対する執着です。

もうひとつは非有愛という、生きていたくないという欲なんです。死んでしまいたい、そういう欲が多くなると人間だけは自死をしていく、私の娘は躁鬱の病で、夢を見ているように瞬間的にずっと自ら命を絶つていきました。死ぬことよりもつらい何かがあったんでしょね。後から手帳等々見てみますと、「私は幸せだ、しかし何か虚しい、恵まれているけれども虚しい」こう出てまいります。人間はいかなる苦しみや悲しみにもしたたかに堪えていける、みなさんもそうでしょう、それぞれがそれぞれ言うに言われない苦

勞をされてきているはずなんです。そこはかなりしたたかに生きていけるというんです、お金がなくても苦しくても生きていける。しかし人間は虚しさには堪えられない、その虚しさのひとつが孤独なんです。独りぼっち。この寂



ど、脳のドーパミンという分泌液が狂ってしまった、パニックを起こしてしまったんでしょね。愛する夫と娘を置いて、自ら命を絶つてしまいました。私は人生においてこれほどびつくりしたことはありません。なぜ、どうして、それはいろいろ考えてみれば、躁鬱の人の一番大変なのは自殺願望欲という、そういう欲が出てきてしまうので、ちゃんと見ていなければいけないけれど、ちゃんと救うことができなかった現実なんです。お寺の子でありながら、お父さんが大学の先生して仏教の教え

誰とも話すことができない。私の娘の場合、何か寂しかった苦しかったことがあるでしょうけ

しさをななんです。人間が最後にやはり寂しくて悲しくて生きておられないその一点は、独りぼっちということ。誰もよりそってくれる人がいない、誰もいない、誰とも話すことができない。

泣いて泣いて

私は、びつくりしすぎて泣くどころではない、どうしてたか記憶にないんですけど、たった二つだけ、高史明という、山口県出身の在日

クリアンの作家です。息子さんが十二歳で亡くなって、その苦悩の中から親鸞聖人の教えに出あわれた方です。よくNHKテレビにも出られます。高先生のところ

に気がついたら電話してなんです。何をしゃべったか覚えてないんですけど、とにかく娘が亡くなった。先生はびつくりされました。「えーつて。その時にひとつだけ脳裏にびびりついているのは、「泣いて泣いて泣いて、お嬢さんの分まで生きて下さい。」こう高先生がおっしゃった。「泣いて泣いて泣いて、お嬢さんの分まで生きて下さい。」それから通夜から葬儀にかけて、とにかく泣いて泣いて泣いて。涙

が枯れないなと思いました。長男はその娘が亡くなる前に、たまたま「おねえちゃん、そんな薬を飲み過ぎたとか、いつまでも甘えてたらだめだ、しっかりとしなきゃあだめだ。」と言ったことにごく自分を責めてしまい、一年間ほど失語症、言葉が出なくなりました。

つれあいは外へ出るのがイヤになりました。スパーで会って「お気の毒様」と言われてもどうしようもない、何の言葉をかけられても受け入れられない。

私も二ヶ月ほど全ての仕事をやめて家にいました。娘の書いた日記を全部パソコンに打ち直した、そんな作業をしていました。持病が悪化し、体調を崩しました。

嘆きは消えぬ消えずともよし

住職が暗い顔をしているので、ご門徒が歌人伊藤左千夫の歌を紹介してくれました。

み仏に 救はれありと思ひ得ば
嘆きは消えぬ 消えずともよし
七枝ちゃんという、伊藤左千夫の一歳半の娘さんが溺れて亡くなった。医者に連れて行つたけれども間に合わなかった。びつくりして悲しんで悲しんで、一歳半ですから、仏さまの教えも聞いていない、仏さまの国へいったらどうか、不安になったんです。大丈夫だと思

つたならば嘆きは消えるだろうか、そんな簡単に消えるものではない、いや消えずともよし、一生涯私はそのことを背負うていこうというのが「嘆きは消えぬ消えずともよし」、実の事実を引き受けていくんです。ああでもないこうでもない、言い訳をするんじゃない、悲しいけれども事実を引き受けていく。

同悲同苦

そんな中で、話は飛びますけど、ひとつ教えられたことがあります。私の父がその年の十二月に亡くなりました。私の娘が七月に亡くなりましたので挨拶に行きました。そしたら「なんだなあ、どうしてだなあ」というだけでした。父は悲しみが分からないのかな、認知症気味なのかな、それから二度行きましたが娘の話は出ませんでした。

父が亡くなり、遺体を整えている時に、兄が私たち夫婦に言った



んです。「お父さんはね、あなたがた夫婦にどう言葉をかけていか分からないと言つて苦しんでいたよ。」それ聞いたときに私はつと思いました。六十km離れた彼方で私の父親は同じ苦しみを引き受けてくれていたんです。私の父も実は娘二人をなくしているんです。十ヶ月と百日、私の姉二人、戦争の大変な時代に亡くして

いるんです。だから私の父親は娘を亡くした悲しみが分かるはずなんです、分かるからこそ軽々しく言えないことに悩んでいた、「同悲同苦」、悲しみ苦しみを共にするということ、多くの人が私といつしよに涙して下さっていたことを教えられました。

人生に春夏秋冬

そこで最後に申し上げることは、司馬遼太郎の「人生に春夏秋冬がある」という言葉。柳田邦男という方の息子さんが亡くなった。息子(洋二郎)さんが亡くなったことを本に書いて送つたら、司馬遼太郎さんが言葉を送つて下さった。

御胸中の万分の一を察し入りつつ、人間のいのちが両親や他の人々にいたわられつつ辛うじて存在していること、いたわりが千万倍ふえようと、掌中の露の玉のように指の間から落ちてゆくこと、そのはかなさ、それは、内村鑑三

のことは強いてあげれば「勇ましく高尚」なものであるかと存じます。吉田松陰は洋二郎さんより、二三歳上でもって生涯を終えました。「人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五、六であろうと、春夏秋冬というのがあるのだ。悔ゆることはない」と死の直前に書きました。われわれは馬齢でありました。二十五歳は宝石であります。まことにまことに。

これを私の友達が送ってくれました。これを読んで私はつくづく思いました。娘の二十五年の生涯というものの中に春夏秋冬がある。ただ私が娘に執着すれば、「もつともつと生きてほしかった」が私の心なんです。じゃあ娘の二十九歳の生命はそれで無駄かということ、二十九歳の中に春夏秋冬があったんだ、むしろわれわれのいのちほど馬齢(世に認められるような仕事もせず、いたすらに年だけ取っているという謙遜した表現)である、ただただ年をとってきたというよりも二十六歳の洋二郎君のい

のちも十分ですよ、私の娘は娘で二十九年のいのちを精一杯生きてくれた。それから九年経ちますけど、まだ娘のことは忘れられません。ふつと娘のことが思われてきます。でもこの頃、娘が先にお浄土に参っている、そのお浄土へ私も必ず参る、そして今、娑婆の縁がある間、私はここで生かさせていただく、そんな時にね、娘と声なき声の対話をやつとできるよつになりました。

「お父さん今こういふことで悩んでいるんだけどどう思う？」—そんなこと心配いらないよ、大丈夫だよ—と言ってくると、ああそうかと。これ自問自答です、勝手に言っているんですけど、遠くへ行つてしまった娘が隣にいてくれるよいうな、そういう今、出あいをあらためてさせていただいております。

(休憩)

後半は、ハンセン病の叔父さんとの出会いを通してのお話でした。

人間解放とは、閉じこめた人と閉じこめられた人が出あつて



いくこと。「まづ有縁を度すべし」ということは、私が救われることが最初。まずわが身が確かなものに救われていくということ。私が救われることによつて隣の人が救われる。一人の解脱ではなく相互の解放が浄土。私をよそに置いておいて、皆救われますよつていうのは観念。俺さえ救われればよいということではなくて、そこにとどまつていられない。同悲同苦の世界に生きていくということ、と中村先生はお話下さいました。

夏休み合同子ども会

去る八月七日、蔵本通支坊で夏休み合同子ども会が行われました。

今年も龍谷大学伝道部からようちゃん（藤本さん）とえーちゃん（安部さん）が来てくれました。大会委員長は、ドラえも



ので、みんな見たこともない良い子でした（笑）。
昼食後は食べ放題かき氷大会。そして人形劇を見て表彰式。ご門徒提供のお土産をもらつて帰りました。



全種類かけてます。

んもどきのアヤシイ人でした。
四班に分かれて色んなゲームで得点を競いました。お行儀点、応援点なども加算される



4班は銀さん賞。仲間を信じてがんばりました。



さる吉くんとレオンちゃんの人形劇。



べーっ。



お土産はシュロの葉っぱで作ったハエたたき。